

水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>

第 2 報
千葉県農林水産部
平成 23 年 6 月 16 日

- 早生の幼穂を確認して、穂肥を遅れずに施用しよう
- 中干し後は湛水管理で品質向上

【 生 育 概 況 】

5月第6半旬の低温や日照不足のために、生育は一時的に停滞しましたが、その後の気温は高めに推移したため、莖数は確保されつつあります。また、葉色が濃く推移していますので、今後の穂肥のやり方に注意する必要があります。

6月15日現在の県全体の水稻の生育の進み具合は並～やや早です。既に最高分けつ期を過ぎつつあり、早生は幼穂形成期を迎えつつあります。適期穂肥のために幼穂の確認をしましょう。

表 1 品種別の生育状況（6月15日現在）

品種	植付時期	平年比※			
		葉齢	草丈	莖数	葉色
ふさおとめ	4月20日頃	並～やや早	並	並～やや少	濃
ふさこがね	4月20日頃	並～やや早	並	並～やや少	濃
コシヒカリ	4月20日頃	並～やや早	並	並	濃
	5月1日頃	並～やや早	並	並～やや少	濃

※ 過去5年間（2006～2010年）の平均値との比較。

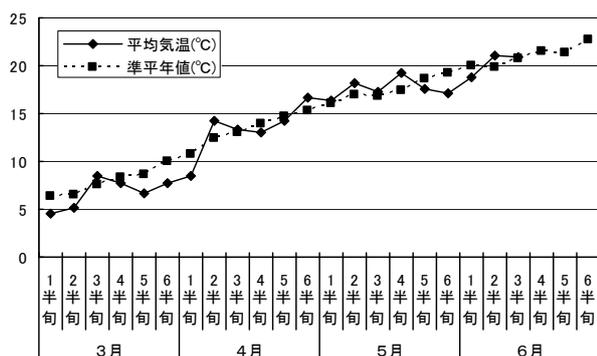


図 1 日平均気温の推移（佐倉市）

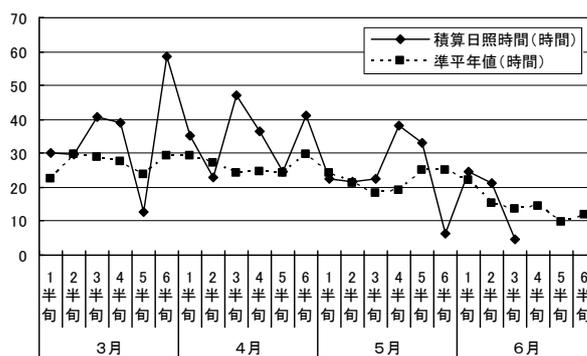


図 2 日照時間の推移（佐倉市）

表 2 品種別の幼穂形成期と冷害危険期の予測

品種	植付時期	幼穂形成期予測（月日）				冷害危険期 予測(月日)
		県北	九十九里	内湾	県南	
ふさおとめ	4月20日	6月20日	6月19日	6月19日	6月17日	6月27日
ふさこがね	4月20日	6月21日	6月20日	6月20日	6月18日	6月28日
コシヒカリ	4月20日	6月30日	6月30日	6月29日	6月27日	7月7日
	5月1日	7月4日	7月4日	7月3日	7月2日	7月12日

※ 幼穂形成期予測は日平均気温に基づく発育段階予測結果。

【 これからの管理のポイント 】

■ 水管理

○ 中干しから出穂後までの水管理

今までの基本的な水管理（①、②、④）の他、自然由来のカドミウムの吸収を抑えるために、③を行うことが有効です。「安心・安全」な米作りのために対策を励行しましょう。

※米のカドミウム残留基準が 1.0ppm から 0.4ppm に引下げられ、基準が厳しくなりました。

- ① 中干しは強過ぎないように、土が湿って足跡が残る程度
- ② 中干しから出穂 3 週間前までは間断かんがい
- ③ 出穂前 3 週間・出穂後 2 週間は湛水管理（幼穂を確認したら湛水開始）
- ④ 出穂 2 週間後から出穂 25 日後までは間断かんがい

○ 低温時には湛水

幼穂形成期以降に平均気温 20℃以下の低温持続が予想されるときは、冷害防止のために深水で湛水（保温）しましょう。

表 3 低温時湛水深の目安

幼穂形成期（出穂 25 日前）から冷害危険期（出穂 15～10 日前）	湛水深 10cm 程度
冷害危険期（出穂 15～10 日前）	湛水深 20cm 程度

■ 早生の穂肥

○ 穂肥適期は幼穂長 10mm のとき

- 穂肥の適期を判断するために、幼穂を確認しましょう。

幼穂形成期は幼穂長 1mm（出穂 25 日前）の株が全体の 8 割に達した時点です。ここから数日が出穂 3 週間前（湛水管理開始期）になります。

穂肥の適期は幼穂長 10mm（出穂 18 日前）のときです。

ほ場の中で中庸な生育をしている連続した 5 株程度を選んで、各株の最長茎の幼穂長を測定します。1mm を超

えた株の数が測定した株数の 8 割に達した日が幼穂形成期です。

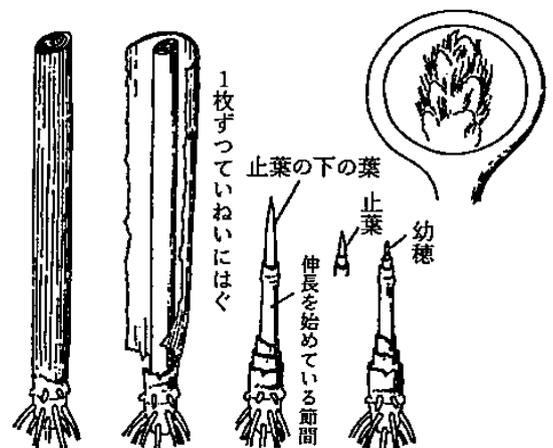


図3 幼穂の確認方法

（出典：農文協 農業技術体系作物編 P134）

■穂肥の遅れは品質低下の要因

図4は「ふさおとめ」玄米の粒厚別タンパク含量について、適期の穂肥と7日遅れの穂肥とで比較したものです。穂肥の遅れが玄米タンパク含量を高め、食味に悪影響を及ぼす可能性を示しています。

穂肥の適期施用は、収量確保だけでなく、米の品質向上の鍵を握る技術で

もあります。必ず自分で幼穂長を確認しましょう。

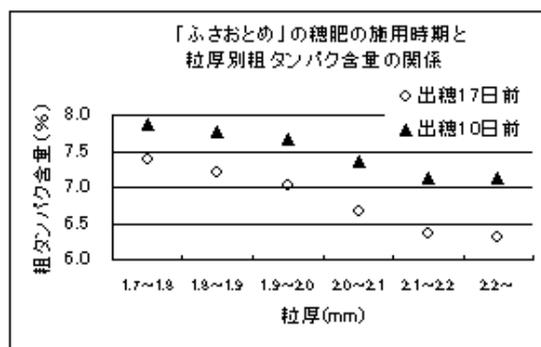


図4 穂肥施用時期と玄米の粒厚別粗タンパク含量の関係

▽ふさおとめ

4月20日植えの「ふさおとめ」は6月17日頃から幼穂形成期を迎えるので、穂肥適期は6月24日頃で、施用の遅れは食味低下の原因になります。施肥量は、砂質土・壤質土では窒素・加里を10a当たり成分量で各3kg。房総南部の粘質土では1~2kgが目安です。葉色は平年より濃く推移しています。表4の目安より濃い場合は、施肥量を減らしましょう。

表4 「ふさおとめ」穂肥施用の目安（幼穂形成期）

品種	草丈 cm	穂肥施用目標茎数			葉色（カラー スケール値）
		砂質	壤質	粘質	
ふさおとめ	55 以下	520~570 本/m ² (29~31 本/株)		450~550 本/m ² (25~30 本/株)	4.0

※ 茎数の（ ）内は30cm×18cmで植え付けされた時の1株平均茎数

▽ふさこがね

4月20日植えの「ふさこがね」は6月18日頃から幼穂形成期を迎えるので、穂肥適期は6月25日頃からです。品種特性上、葉色は「ふさおとめ」よりやや濃いですが、施肥量は、窒素・加里を10a当たり成分量で各3kgです。

表5 「ふさこがね」穂肥施用の目安（幼穂形成期）

品種	草丈 cm	穂肥施用目標茎数	葉色（カラー スケール値）
ふさこがね	60~65 以下	450~500 (25~27 本/株)	5.0

※ 茎数の（ ）内は30cm×18cmで植え付けされた時の1株平均茎数

▽コシヒカリ

「コシヒカリ」の幼穂形成期は6月下旬以降と想定されるので、穂肥施用については第3報（6月24日発行予定）で記載します。

■ いもち病防除

梅雨期はいもち病の発生しやすい条件になりやすく、注意が必要です。特に今年は平年より葉色が濃いので、平均気温 20～25℃で曇雨天が続く場合、葉いもちの発生が懸念されます。発生が見られたら早期に薬剤防除しましょう。

薬剤は5ページの表 6を参照してください。

■ 出穂 2 週間前までの畦畔雑草防除

畦畔雑草はカメムシ類が水田に侵入するのを助長します。出穂2週間前頃までに畦畔雑草を刈り取りましょう。



図5 ふさこがね（4月20日植え）

6月16日（千葉市緑区刈田子）の様子

茎数は並～やや少なく、葉色は濃い状況。今後、湛水管理に入る。

表 6 いもち病の主な防除薬剤

作用性	薬剤名	使用時期／使用回数	使用時期／使用回数の注記	10a 当たり散布量
予防	オリゼメート粒剤	右記／2回	葉いもちには初発 10 日前から初発時に、穂いもちには出穂 3～4 週間前（ただし、収穫 14 日前まで）に散布	3～4kg
	キタジン P 粒剤	右記／2回	葉いもちには初発 7 日前から初発時に、穂いもちには出穂 20～7 日前に散布	3～5kg
	コラトップ粒剤 5	右記／2回	葉いもちには初発 10 日前から初発時に、穂いもちには出穂 30～5 日前に散布	3～4kg
	// ジャンボ	右記／2回	葉いもちには初発 20 日前から初発時に、穂いもちには出穂 30～5 日前に散布	10～13 個
	ブイゲット粒剤	収穫 45 日前まで／2回	葉いもちには初発 20～7 日前に湛水散布	3kg
	フジワン粒剤	収穫 30 日前まで／1回	葉いもちには初発 10～7 日前に、穂いもちには出穂 30～10 日前に散布	3～5kg
	ラブサイド粉剤 DL	収穫 7 日前まで／3回		3～4kg
予防・治療	イモチエース粒剤	収穫 35 日前まで／1回		3kg
	カスラブサイド粉剤 DL	穂揃期まで／2回		3～4kg
	ノンブラス粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2回		3～4kg
	// フロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2回		下注参照
	ブラシン 粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2回		3～4kg
	// フロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2回		下注参照
治療	カスミン 粉剤 DL	穂揃期まで／2回		3～4kg
	// 液剤 1,000 倍液	穂揃期まで／2回		下注参照

注：乳剤、フロアブル剤、液剤の 10a 当たりの散布量の目安は、次のとおり。

本田初～中期：100～120 リットル、穂ばらみ期・出穂期：120～150 リットル

◆ 震災で田植えを遅くした稲の栽培管理 ◆

第1報では、遅植え稲の全体的な管理のポイントについて記載しましたが、第2報以降では、生育ステージごとの管理の留意点について情報を発信していきます。

[現在の遅植え稲の生育状況]

品種	植付時期	葉齢 (枚)	草丈 (cm)	莖数 (本/株)	葉色 ※1	幼穂形成期 予測
コシヒカリ	5月16日	7.5	32	13.6	同程度	7月10日頃
コシヒカリ	5月25日	5.9	29	9.3	やや淡	7月15日頃

調査場所：千葉市（水田作研究室）、植付株数：60株/坪、植付本数：4本/株

※ 1：5月1日植コシヒカリとの比較

5月中旬植えは葉色が濃くなり始め、盛んに分げつを増やし始めています。5月下旬植えは、全体的にはまだ葉色は淡いものの、新しい葉の色は濃く、分げつも見られ始めています。5月下旬の低温やその後の日照不足が心配されましたが、おおむね順調と考えられます。

☆6月植えの状況についても、第3報以降でお伝えします。

[これからの管理の留意点]

○ いもち病に注意！

苗や分げつ期の稲は、「いもち病」にかかりやすい傾向があります。遅植えの稲は、梅雨の最中に田植え時期や分げつ期となるので、「いもち病」に注意が必要です。置き苗は速やかに処分し、ほ場を見回り、早期に薬剤による防除を行いましょう。薬剤は5ページの表6を参照してください。

○ イネツトムシ、イネアオムシに注意

遅植えの稲は、分げつ期にイネツトムシやイネアオムシが発生する場合があります。葉がツト状に綴られていたり、食害痕が多く認められる場合は、トレボン粉剤 DL などの薬剤による防除を行いましょう。

○ 高温下での除草剤散布に気をつける

マメット SM、クサナイン L フロアブルなど、シメトリン、ジメタメトリンを含む除草剤は、平均気温30℃以上の高温時に使用すると、薬害が発生しやすいので、天候によっては使用を避けましょう。

○ 出穂3週間前～出穂2週間後は湛水管理！

カドミウムの吸収を抑えるため、出穂3週間前～出穂2週間後は湛水管理とします。通常の田植えと出穂時期が異なるので、注意が必要です。幼穂形成期を過ぎたら、湛水を開始します。詳しいことは、2ページの「水管理」を参照してください。

○ 農薬のドリフトには要注意

用水の供給が遅くなった地域では、ほ場により田植え時期が大きく異なっている状況です。このような地域では、出穂時期もばらばらになることが予想されます。農薬には使用できる収穫前日数がありますので、特に粉剤、液剤はドリフトを起こさないように注意して散布しましょう。

遅植え稲の現在の生育の様子



図6 コシヒカリ（5月25日植え）
6月16日（千葉市緑区刈田子）の様子
新しい葉の色は濃く、分けつも見られ始めている。